明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可

岐蘇林友

大正元年十月二十三日印刷
大正元年十月二十五日發行
（定價三錢）
編輯兼發行人　長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地　安井正夫
印刷者　長野縣松本市本町百八拾四番地　兎澤忠雄
印刷所　全縣全市全番地　交文社
發行所　長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地　蘆澤書店

○岐蘇林友

目次

論說、新校舍へ移轉に就て　竹軒
學術、增川製材所概說　竹內房太郎
拔萃、鎭守の森を保存せよ　白井博士
文苑、西筑摩名木　西筑摩郡調査　秋期旅行記。秋の日。蹇蹇雜の遊。日記。和歌
通信、竹內房太郎君より寄宿舍便り
雜報、學校日誌。林界雜俎。會員移動。會計報告。其他

論說

新校舍へ移轉に就て

竹軒

雜報欄に報道せるが如く木曾山林學校は愈十月一日を以て十年久戀の福嶋町を去りて東北の方十餘町新開村地籍なる新校舍に移轉する事となりぬ回顧すれば廿有餘年の昔明治二十一年の建築に係る舊福嶋小學校は即ち山林學校の前身にして明治卅四年を以て郡立山林學校と爲り明治卅九年縣立と爲りしより時勢の進運と共に其內容實質は漸次改革充實せられしと雖も其外觀に至りては十年一日の如く毫も舊容を改めず爲めに狹隘を感ずる事甚しく遂に新築の已を得ざるに至れり嗚呼嘗て校舍の宏壯と輪奐の美とを以て郡內第一と呼ばれし舊校舍も今や村落僻陬の小學校舍に劣り年々歲々增加し來る入學者を收容する事能はざるに至りぬ恰も是れ小兒時代の衣服が大人となるに及びて其用に堪へざるに至りしが如し時勢の進運實に驚くべく我校の發展亦慶すべきにあらずや

新校舍は西筑摩郡新開村の山谷にあり土地固より廣からずと雖も山水淸遙遠く市井の雜塵を絕ち最も靜修に適し殊に演習林及苗圃の近接せるは多大の便益を與ふるものにして吾人は朝に四周の山巒を眺め夕に脚下の溪流を臨み或は演習林に交り或は苗圃に下り立ちて其心思を涵養し其學業を研磨するを得べく山林學校として最も好望の位地たりと云ふを憚らす而して此際吾人の最も注意すべきは校舍移轉てふ一大好機を捉へて心機一轉の樞軸と爲し進修改善の動機とするに在り若し我校にして些なりとも舊來の陋習ありとせば此際須く一掃すべし而して在來の美点は益々之を助長せよ斯くて新鋭の意氣を以て大正の大御代に適應すべき一個完全の人格を養成し益々吾校風の發揮に努力すべし

吾校は曩に改元と同時に新校長を迎へ今又更に新校舍に移轉するの運に際會せり吾人豈亦新覺悟なくして可ならんや

學術

青森大林區增川小林區署增川製材所概說

會員　竹內房太郎

一、總說

增川製材所は明治四十二年二月一日の創立に係り青森縣東津輕郡三厩村大字增川にあり其の敷地面積七千三百二十九坪にして東は青森灣に沿ひ運搬設備としては海岸棧橋の設けあり容易に搬出することを得製材資料は主として增川、今別の兩事業區ヒバ材を以て之に當て角類其他一般の材樹を製出す

一ヶ年の製材力約三萬五千尺〆とす

二、建物

工場は亞鉛葺平家一棟にして別に平家建倉庫建一、事務所、職員官舍二戶建共三、職工宿泊所一、巡視詰所二あり、附屬建物としては職工の控所の物置ポンプ小屋等あり其總建物四三〇坪五九とす

三、製材工場

本工場は其の建物百九十六坪五合四勺にして內譯は鋸工場目立室氣罐室修理室汽械室、の五室に區劃せり今場內各室に於ける設備の概況を示せば次の如し

（イ）、汽機

東京越中島鐵工場製にして横置式單汽甬瀘機にして常用瀘壓百封度毎分の廻轉數百經濟的實馬力百を有す

（ロ）、瀘罐二基

東京越中嶋鐵工場製コルニッシュ型にして常用汽壓百封度鑵胴長二十三呎徑五呎六吋附屬としてウオシングトンポンプ一臺あり

（ハ）、鋸器械及功程の概要

	鋸器名稱	員數	鋸ノ大サ 鋸輪經密	樹種	材種	長	員數	材積	摘要
1	大割帶鋸	一	一、二〇〇	ヒバ	角材	一四尺	號本	六九〇尺ノ	各機一日ノ功程
2	〃	〃	〃	〃	小角	〃	八〇	一、三〇〇	
3	〃	〃	〃	〃	枕木	八尺	一二〇	四〇〇	
4	單式小割	一	一、二二〇	〃	板割	二間	四四〇	二、八〇〇	
5	〃	〃	〃	〃	七分板割	〃	四八〇	三、九〇〇	
6	〃	〃	〃	〃	正六分板一間	〃	七二〇	一、九〇〇	
7	〃	〃	〃	〃	正四分板	〃	九三〇	二、四〇〇	
8	自動ローブ送丸鋸	一	經一、二〇〇	〃	角材	一四尺	五六	五二〇〇	
9	〃	〃	〃	〃	小角	〃	九〇	一、二〇〇	
10	〃	〃	〃	〃	枕木	八尺	一四尺	三四〇〇	
11	平動丸鋸	二	七二〇	〃	大貫込	〃	五〇〇	一、二〇〇	
12	〃	〃	〃	〃	中貫	〃	六〇〇	九〇〇	
13	〃	一	六二〇	〃	小貫	〃	七二〇	三〇〇	
	横切振子鋸	一	六〇〇	〃	板貫角ノ鼻切				

（左記番號は摘要欄の番號なり）

1、五割面付挽角にして一日の効程

2、三寸より五寸角迄込一日の効程

3、巾七寸五分厚さ五寸のもの一日の効程

4、帶鋸又は自動ローブ送丸鋸にて辨用に引落したるものを挽立の塲合

5、6、7は前同斷

8、五割面付挽角挽立の塲合

9、三寸角より五寸角迄

10、巾七寸五分厚サ五寸

11、以上三鋸より生産する皮板を利用製作す

但一臺の効程とす

12 13は前全斷

（備考）製作する材種は右の外帶鋸にありては平割丸鋸にありては小割物木摺等を製作す

（二）、目立機械

自働帶鋸目立機　一臺

堅鋸及丸鋸目立機　壹臺

四、電燈用發電機

本機は工塲内瀘機室に据付あり芝浦製材塲製にして四キロウフト岸特許式直流瀘械直結型複捲田磁電壓百ウォルト電流三十五六アンペア毎分回轉五百極數四夜間作業の便に供す

五、製材所創業以來に於ける概要

本小林區部内に於けるヒバ生産材は毎年六万千五百尺〆余にして部内に於ける木材市塲は三厩今別の兩港あり出材せるものは凡て兩港に集材するを常とす之れ部内工塲地と稱するもの其の地勢狹長にして直ちに海に接し多數の集材不可能なると船積に於て不便あるとに依るものにして爲めに常に運搬費に多額の冗費を仕拂はざる可からず茲に於てか是等冗費の節約を計ると共に斫伐に伴ふ利用を圓滿にし集約なる方法により一般本材の需用に應せんがために茲に官設增川製材所の設立をなしたるものにして本製材所亦創業以來日淺く既往の實行結果を以て直に斷じ難しと雖もヒバ材の需用は稍增進の域にあり操業亦漸次順境に向ひつゝあり今累年に於ける原料及製品其他續行の概況を表掲し其の大要を示さん

（一）製材原料及其製品

年度別	樹種	拂出原料材積	生産製品材積	原料對製品歩合	備考 創業年度
四十一年	ヒバ	一、三六二	八六二	八八%	四十一ケ月間の分
四十二年	〃	三三、八一〇	二〇、六八〇	六二	
四十三年	〃	三〇、九二四	一六、九七四	五五	
四十四年	〃	三五、八二四	二三、七二九	六九	

（二）製材經費

但本表は製材事業費に直接關係少き營繕費及職員給料等を除き事業費のみに付き年度別に列記比較したるものなり

年度別	科目	製材費	經費	一尺〆當り
四十一年度	製作費	六六二	一、八七四二〇	一七七一
	器械材料費	〃	四〇三三〇	六〇九
	處理費	〃	八四九七五五	二七七
	輸送費	〃	五一九三〇	六八
	計		二、四七七	四三七
四十二年度	製作費	二〇、六八〇	九、七九二六〇	四七七
	器械材料費	〃	一、六七七一八〇	八一
	處理費	〃	一、九四八五五〇	九四
	輸送費	〃	二、〇七四四二〇	一〇〇
	計		一五、四九二三五〇	七四九
四十三年度	製作費	一六、九七四	九、八八四二〇	五八二
	器械材料費	〃	一、六二四六〇	九六
	處理費	〃	一、七七五六〇	一〇四
	輸送費	〃	四〇〇四二〇	二三
	計		一三、六六九九〇	八〇六
四十四年度	製作費	二三、七一九	八、九七五二六〇	三八二
	器械材料費	〃	一、六七九六〇	七一
	處理費	〃	二、一八〇三〇	九二
	輸送費	〃	一三六〇〇	五
	計	〃	一二、九五八〇七〇	五五一

（ニ）製品賣行の狀況

本製材所に於ける製品賣行の狀況は相内製材所のそれと相一致し四十一、二兩年度は共に不況なりしも今や漸次其需用を增し販路亦大に開拓せられ順境に向ひつゝあるの狀況なり今左に概要を示さん

製品受入材積に對する處分材積の比較

年度別	生産材積	處分材積	總受入材積	處分材積
四十一年	六六二	一二〇	一、一九二	一二〇
四十二年	二〇、六八〇	一三、五三二	二一、二二一	一三、五三二
四十三年	一六、九七四	一八、四六二	二二、七五九	一八、四六二
四十四年	二三、七二九	二三、四六〇	二四、六二〇	二三、四六〇

製品売行地方別累計比較

地方別	四十一年度 材積	四十一年度 價額	四十二年度 材積	四十二年度 價額
加越能	一二〇尺ノ	六九九円		
青森縣	〃	〃	〃	七、六二〇尺ノ
東京府	〃	〃	〃	二九、〇七八円
名古屋	〃	〃	三、五九	〃
北海道	〃	〃	二、三〇六	一三、一四〇
京都	〃	〃	〃	二、三九〇
博多	〃	〃	八	〃
官廳	〃	〃	〃	三一〇
計	一三〇	六九九	一三、五三二	四十四年度 五六、一一八
四十三年度				
加越能	九、三四八ノ	三八、八七五円	一六、九二五ノ	八六、二五六円
青森縣	一、二五一	三、五〇一	〃	三、三四五
東京府	六、七五五	二八、九九二	一、三五一	一五、五二六
名古屋	〃	〃	三、三五八	〃
北海道	九三四	二、六二八	一、三二七	七、一五八
京都	一四三	五四八	〃	〃
博多	〃	〃	二四七	一、二四一
官廳	〃	〃	二三三	七一七
計	一七、七二一	七一、八一五	三一、四六〇	二一二、一四三

拔萃

鎮守の森を保存せよ

理學博士　白井光太郎

鎮守の森は古來除地と稱し無税地なりしを近年人民に拂下げ勝手に處分せしむるがために伐拂はれ開墾せられ殺風景の有樣となりはてし處多し、或は又無代にて村里に下附する代りに社地を廢し宅地又は田畠とし神社は之れを他に合併せよとの下に滅却せられたるもの多し、斯の如く神社に附屬する神林を拂下げ又は無代にて村里に下附するは一見美事の如く思はるゝが惡弊疊出し其實は有害無益の甚しきものなり

鎮守の森は村里に於ける神靈の所在地、祖先の招魂塲、德育の淵源にして、國家的觀念の養成所たるのみならず村童の幼稚園青年の角力塲、天然紀念物保存塲等をなす者にして、農村に於ける小規模の公園動物植物園無言の說敎所とも言ふべき者なれば國家の在立上至大の効用あるや論を俟たず隨て之を愛護保存すべく決して無用の長物視して廢滅せしむべきにあらず、我國古來の政治家が各地に散在する神社に神林を附屬せしめ之を國有として保存せるは、國家の經營上至當の政策にして毫も間然すべき所なし、然るに今に至り之を拂下げ又は開放して人民の自由に處分せしむるは怪訝に堪へざる次第にして余輩其の何の意に出づるを知るに苦む也。（信濃民報より轉載）

西筑摩の名木

二十二株と註せらる

既報西筑摩郡三岳村三尾區阿彌陀櫻名木の外今回郡衙に於て調査せる名木は左記の如

	所在地	周圍尺	樹高尺	樹齡尺
木祖村 御野立の松	薮原峠	七	六〇	三五〇
〃	同	二〇	一〇〇	三〇〇
〃	小木曾	二五	九〇	一〇〇
〃	深澤	二五	五三	三〇〇
日義村 義仲元服欅	宮越	三五	五〇	一五〇〇
〃	元宿	五	三〇	三〇〇
福島町 御關の扁柏	池井	八	六〇	五〇〇
〃	谷	一二	八〇	三〇〇
二本松	伊谷	一二	八〇	六〇〇
御靈の扁柏	靈神社跡	三〇	一〇〇	三五〇
三本檜	興禪寺			
新開村 義仲元服松	上田	一二	四五	三五〇
〃	天滿宮	一六	三五	七五〇
駒根村 オキノ松	寢覺	九	四八	一六〇
大桑村 櫻	須原	二五	九〇	四五〇
〃 杉	長野	三二	三〇	四五〇
〃 杉	野尻	三〇	七二	五〇〇
〃 杉	須原	三〇	九〇	六〇〇
讀書村 杉	興川	二八	三〇	三〇〇
〃 杉	戸塲	四三	二〇	四〇〇
〃 杉	十二兼	三〇	九〇	五〇〇
吾妻村 杉	妻籠	一九	一二	三〇〇
神坂村 杉	湯舟澤	二五	二三〇	四〇〇

更に少しく其傳說を記さんに木祖村『御野立の松』は鳥居峠の頂上にあり維新前は江戸參勤の諸侯必ず此處に休憩し明治十三年今上陛下御巡幸の節は樹下に御野立あらせられたり、五本杉は御野立の松と並び（木曾の杉浮世の八の土産かな）と云ふ芭蕉の

一句を刻せられて以來四方に喧傳せらる。觀音の花柏は特記するほどの傳説なし。兼平の花柏は治承年間今井兼平此の地に館したりとて此の名あり往年地上三十八尺の所より風の爲に折斷せられ其處より無數の小枝簇生せり日義村義仲元服の櫸所在地たる八幡宮は木曾義仲の創建に係はり平家追討の爲め以仁王の令旨を傳へて此處に信濃の源氏を集めたり。小枝の岩は木曾川水中に直立する岩上にあり岩の大さ水上高さ五間ありて木曾義仲母公小枝御前の愛觀したるものなりとも傳ふ。福嶋町御關所の檜は慶長五年幕府の關所を置きたる際の並木の殘り『二本松』は水無神社にありて同神社が飛驒の國より遷座の際此の松に休憩せられしと傳ふ。御靈の檜は靈神社跡にありて本社は木曾宣公及び四天王の靈を祀れる所にして其際社前に鳥居のかはりとして植へたるものなり。新開村義仲元服の松は木曾義仲元服三代目の松と稱す、二代目の松は樵臣として今尚此の尻家にあり初代目松の事蹟は詳かならず。櫟は上田區天滿社内にあり木曾義仲手習天神の御神木と稱し古來此木へ上り又は枝折等をなせば直に災禍を受くと傳ふ木曾義昌の手植の櫻は黒川區東山にありて老大木にして春期開花の候は壯觀なり村民柵を設け保護に力む。三岳村阿彌陀櫻は三尾區阿彌陀堂境内にありて傳説の記すべきなきも開花の候は美觀を極む。駒ケ根村オキノ松は上松寢覺の松原にあり傳説記錄なきも天下の奇勝寢覺床は此の松原に依りて更に一段の光彩を添へ繪葉書とせらるる讀書村欅は明治十三年　明治天皇陸下御巡幸の砌天覽に供したる欅なりと云ふ

文苑

秋季旅行記

二學年　松波　山人

九月八日紅葉には早く避暑には遲き九月の始め八日の日は秋季旅行發足の日なりき、一行三十有三名旅裝甲斐々しく北村佐藤兩教諭引卒の下に福嶋六時二十分發の列車に搭じ三年生諸兄と別れ一年生と上松驛に下車せしは七時一昨來よりの雨は未だ止ず初秋の悲を痛く身に覺えぬされど如何で意氣消沈すべき吾校の健兒威風凜々渡舟及釣越にて對岸に渡り小川伐木所に向ふ小川に添ひて或は田の畔或は岩の下を通り第二の寢覺の床を眺め立木うのまゝを電柱に使用せしも可笑しく十時頃事務所に至る當所に本校卒業生T氏I氏あり一行の爲にたし氣もなく山の樣焚火を致し下されたのは嬉しかつた、火に温りながら辨當を嚙り後事務所の人に伐木山下し運材の話を聞き彼の五月夥し新しき合標たよりに金剛杖をつきながら熱田白鳥貯木場にての話と思ひ合を甚だ益らいで駒の一番乘を爲さむ哉と急ぐもの落する處があつた『エントコサ』と一山越て一年生と分れ千秋街道を阿寺にと辿る天然木の典型たる木曾の山黒き迄老ひ繁れる林、雨の音淋しき山道を行く泰然と構へたる墓君に吃驚させられたしげもなく良い木を使つた二本橋危き獨木橋をすぎ四時阿寺北澤鑛泉に到着ず一浴の後親しむ可き爐に集り或は膝坊主を抱き或はコート脚袢を乾しながら辨當を嚙り後事務所にて風呂を見る扨ては小屋近きにあらむと急げば前方に見ゆる小家の家根噫尺も減りし腹を滿し七時半夢地を辿りぬ

九月九日　モウ御飯が出來ました妙なアクセントをつけて呼ぶのに目を醒せば戸外は雨の音屋根を叩くアヽーと嘆聲を洩し乍ら臥床を蹴る薄暗きラムプの下で五時朝餐を喫し六時出發雨の中を二里半歩いて野尻から上松迄汽車上松から五里駒ケ岳へ登るんだと考へた時は實にいやになつた拾五町餘下の阿寺伐木事務所前よりは阿寺川に添ひしドロの線路を野尻に向ふ蒼巒突出巍然として奇を爭ふ岩笑ふが如く訴ふるが如き或は奔り座する岩皆阿寺の清流に添うて天然の美景をなす斯る奇景を眺め乍ら野尻に着せし時は先程の事も杞憂にすぎ切れたる雲間よりは太陽の笑顔を望むを得たり野尻驛八時五十五分發列車に搭じ上松着十時支度を調へ昨預けし米と味噌とを肩に十時半案内者を先登に駒ケ岳へと歩を運ぶ先程の晴れも暫時にして何處迄も意地惡き天は又もや吾目指す駒の雄峯を麓より隱しぬ、されどいかで勇氣挫く可き一合目二合目三合目敬神瀧にて大賴朝ならで小賴朝公をしかもオンリー一つ如何で吾健兒の腹の虫の承知すべきされど如何せむ駒ケ岳登山中茶屋一軒もなしナアニ一度や二度喰はんでもかまはんと勇を皷して登る此處より急峻なる事夥し新しき合標たよりに金剛杖をつきながらいで駒の一番乘を爲さむ哉と急ぐもの落伍するもの六根清淨……懺悔……登行者然たるものあり登り登る七合目の中頃よりのコメツが帶よりは烈風狂雨交々至り吹き倒されんとす八合目中のハヒマツ帶よりは勢彌々加り加之千仞の谷前にあり身も世もあらぬ思して金剛杖に囓りつきながら南無駒ケ岳大明神と祈り乍ら一山を廻ると石を重ねて風除けしあるを見る扨ては小屋近きにあらむと急げば前方に見ゆる小家の家根噫其時の嬉しさは手の舞ひ足の踏む處を知らぬとは斯る時使ふ言葉ならんと思はれた急ぎ轉び込んで煙に咽び乍らも樂しい焚火に温る時三時を過る事五分嗚呼……嬉しかつた

と叫びながら小家の重い戸を排し跳び込み跳び込むで六時最後のFMHの三君は三合目より病みしO君を上松驛迄送り然る後登山せしとか其義俠と勇氣とは嘉す可きだ頂上迄は尚八町餘あるとの事誰も頂上の頂の字だに口出す者なく絞る位濡れたヅボンコートも二尺四方の爐にもえの惡きハヒ松の焚火にては乾す術もなく直樣布團にくるまつて寢るものもありたり六時半八千尺の高所にての飯熱汁をモウ一杯吸いたいなあ……と彼の隅此の端より起れど小き鍋なれば一杯宛吸へとの事飯計にてもかまはんと鰹腹詰め込むで七時三人二枚宛の煎餅蒲團にくるまり古風な行燈の下にて流石疲れし事とてまどかなる夢は結ばれたり

九月十日　ガタ〳〵戸を搖る風雨の音に目を醒せば風雨は依然として止す四方の眺は言はずもがな僅な桶に溜りし水に口を嗽ぎ六時半朝食を始むO君と佐藤先生頂上指して登り行きたれど谷へ吹き落され相との事にて頂上行は中止小家の中にて人員檢査而に上松道を昨日通り下山す金剛杖を賴りに早き者は九時遲き者は二時の汽車强き者は膝栗毛に鞭うちて濡鼠に爲りし丈にて無事歸校しぬ

秋の日

海波

時將に十月の節に入りて氣頗る清し。野には今尚ほ七草の殘香を吐くものあり。田圃の稻は黄熟を帶び重くるしく頭を垂れて豊年なるを悟らしむ

木々になきし蟬の聲も今や消え失せて虫の聲いとかなしく聞ゆなれ、げにや秋は深沈の時なり。とりどりに見ゆるは紅の色。頻りに騷ぐは鳥雀の聲にて一入賑かさを增したり。されど今は諒闇中のことなれば吾等學生は此の自然の美、自然の音樂にうかされて不謹愼の行爲あるべからず、專ら此の期を利用して体を鍛へ智を磨き夙夜奮勵努力すること一日も怠るべからず

明治天皇の御遺詔に答へ奉り　今上天皇の御聖旨に副ひ奉らんことは吾等青年の寸時も忘るべからざることなり。而して大なる事を成さんと欲するものは先づ其の原動力とも云ふべき身体の鍛錬を圖るべきなり。身体健全なれば何事に從ふとも中途に挫折すべき事なきは誰しも知る所なり。何人たりとも健全なるは望むべき事なれど殊更に實業家に必要なることなり。今や天高く馬肥ゆるの候、六日の學課怠らず而も其の一週間のうさはらしは日曜を以て野外に逍遙するにあり、秋の野は吾等を迎ふる爲めに充分なる用意をなして待つゝあり空は清く晴れ一点の塵だになく種々の果實は叢間に飾られて紅紫相映じ林間には鳴禽互に獨特の聲を放ち清くすみたる細流には魚躍る。吾等が手足は思ふまゝに此の間に其の意氣を增さんとす。斯くて家に歸らば頭腦再び新らしくなりて如何なる難解の事柄をも容易に究むることを得んさらば行けよ諸君、秋の野に！

一日琵琶湖邊に遊ぶ

田中　秀峯

昨夜の夕立は廓然と晴れ雲脚最と早き八月二十日は我等同郷の學生拾參名が琵琶湖畔の風景を探るべく出發するの日であつた、檜製に一定の記號を施したる質素なる帽子に身を堅めたる一行は午前七時五分意氣堂々長濱波止場に到着せしは八時二十五分前であつた、使用滊船は太湖滊船會社の經營になる三百五十噸の第二庚辰丸で出帆時刻の八時と云ふに漸く開札口を開きて滊船の左舷側に集合せしめ同三十分に乘船を許したが、さしもに廣き甲板も悉く人を以て充され當らば鐵板をも容易に拔かんばかりなる勢の我等一行は早くも團欒の一畫を描いた未到着者を待つこと約十五分にして耳を聾せん斗りなる滊笛と同時に茲に少時の別れを惜みつゝ船は長濱港を離れた、港内に待ち飽きたる苦しさに引換へ港外の涼風は身邊を襲ひ恰も渴後の熱腸に一杯の氷水を傾くるの感があつた、今迄唯無言の儘悄然として居つた乘合の人々は俄かに動搖めき始めて船は何時しか長濱城址や豊公園の邊りを過ぎて間も無く南濱の畿橋に着いた。

當地は有名なる姉川古戰場の下流であつて時々刻々に流出する砂礫は淺洲の範圍を廣めつゝあるは其他の漁業者の慨嘆する所なれども今尚ほ湖東漁業界の首位を占めて居る、九時十分同港を發し竹生嶋に至る其航路は頗る平穩で船は恰も鏡面を走る玉の如く一行は兼て用意せる辨當を開き竹生島に着する迄では早や其大半を葬り腹の中をして益々堅固ならしめた、九時五十分嶋に着きしに上陸者の混雜甚しく余は船上に殘留して一行の携帶品の監視に務めた、同嶋は日本三辨財天の一であつて安藝の嚴嶋相模の江の嶋と相竝んで稱へられ西國三十三所の一に數へられてある　樹木鬱蒼の間飛禽翱翔せる園内を逍遙すれば神氣豁如として俗塵を去るの想ひがする

十時五十分同嶋を發し東隣の小嶋を迂回し（東北隅が位する地獄穴を左に見進んで今

津の東方九千米突の冲合を南しつゝ優に一箇師團を収容し得べき陸軍廠舎や饗庭野を僅々寸許りの双眼鏡に眺めつゝ徐々に進行する折しも轟然たる音響耳を劈く　これ伏見工兵第三十七聯隊の健兒五百餘名が燎くが如き炎天をも事ともせず爆破演習中であつたとは後より北村船長の言によつて知られた、船は我等一行が將來に深き印象を劑したる當地を後へに最大速力を以て南航した時は暫時船中拍手を以て鳴り響いた。

午後一時近江舞子の稱ある雄松崎に着いた此所は湖邊一面に白砂を以て敷かれ生ひ茂る青松を吹く風は間斷なく打寄する浪の音と相和して仙境も斯くやと疑はるゝ許であつた、松は古し砂は白し風薫る濱など噫々愉快と心の中に連呼しつゝ一行中繪葉書店に吶喊するあり散歩するあり松蔭に憩ふもあり中には脱衣一番水中に飛び入り海國男子の本領を現はすものすらあつた、二時十五分晝食を喫し再び庚辰丸上の人となつて長命寺を指して纜を解いた、雄松崎、長命寺間は約四哩の航程であつて冲の嶋、奥の嶋の眺望は迚てもだ筆舌の及ぶ所でない瀬戸内海に優るとも決して劣らぬと思つた、三時十五分長命寺に着いた。

當長命寺は奥の嶋の頂上にあつて西國札所の一で四時諸國からの參拜者が絶え間がないさうだ、聞しに優る壯嚴なる堂宇と千にも近き石段とは實に有名なものである、一行中（KS）君一人を携帶品監視當番として船中に殘して肩々相摩し殆んど競爭的の石段昇りを試みて拜禮を濟し事務所にて少憩の後下山して其暑さを忘れんが爲め四時八分の出帆間際迄海士の捕虜となつた。

鑑て拔錨して多景島に向ふ折しも北方の烈風吹き荒んで波激しきが爲めに万事に拔目の無い船中の商人は早くも此の樣を見て取り彼所此所に仁丹々々、ぼいすに清心丹と節面白く賣り廻るのであつた、船は怒濤狂瀾の間を切り拔けて、白石の西方を迂廻するのである、此の嶋は只岩石の水面上に屹立せる一小嶋に過ぎないけれども水禽の巨濤と戰ひ該嶋へ逃げ歸る樣は到底言語に絶せりだつた面白くも又物凄い、此の嶋は湖中の最も中央に位するを以て逆卷く怒濤は思ふが儘に船中の我等を一呑にせんとする有樣に何人も動搖めき始めた、船員は戰慄しつゝある小兒等を嚇しつゝ九死に一生を得て漸く多景島に着いた。此の嶋は僅か一哩内外の周圍を有する小嶼なれども木々の配列巖石の起伏等は中央に建立しある見塔寺と相俟て面白く思はず快哉を叫んだのであつた。

波濤に躊躇した船長は上陸の可否を我等一行を始め乘客一同の者に求めた、上陸を欲する者半數以上あつたから、屈竟の水夫貳名に命じて纜け該嶋の老松に縛り船体を引寄せやうとすれども狂ひに狂ひたる怒濤は容赦も無く綱を截つて仕舞つた、けれども不撓な水夫は尚目的を貫徹すべく寺の和尚や小僧等と協力して前同樣幾回も行つたが更に其効力がない遂に上陸を思ひ留まるの止むなきに至つたのは大に遺憾とする所であつた、六時二十五分惘然手を空しうして一行を見送る寺の和尚を後にして出帆し彦根の西方を航行する頃は最早波は靜かになつて始めて蘇生の思ひをなして船中所々に笑聲さへ聞く樣になつた。

無事長濱港に歸着した頃は戸々の電燈は燦然として廣い街路を照らしつゝある七時二十分であつた（大尾）

日記　寛水

八月　日

叔母さんと皿の奥樣と湯に行つた　後、八疊の眞中にゴロリ横になる

中庭の萩に宿す露は、紅く、青く、紫に光つて奇麗だ

蜻蛉の樣な雲は、ラクダの樣な雲の後を追ふて北へ飛んで行く

門に一臺の車が留まつた『御苦勞でした』なつかしい聲？……しばらくすると室の入口で『お伴はどうしたの……』これもなつかしい聲？、ふり向くと松本の姉がニッコリ立つてゐた

叔母さんも、皿の奥樣も湯から歸つて、お土産の桃を食つたり、お茶を飲んで一日を送る

八月二十五日

夜來の雨は名殘もなく晴れ渡つて、面を吹く風は冷氣を帶びてゐる

例の桑摘みだ、露がよく乾かないから、桑に觸る毎に、銀の玉はポロ〳〵落ちる

稻の穗も出揃ふ

もう秋も近い、鳴く蟬の聲まで變つてゐる

たしかに秋の聲だ

桑摘み後は芋堀り、一鍬深く打ち込んで引きおこすと、大きな芋が、五つも六つも、ゴロ〳〵と出る、愉快々々々で堪らない

中には鍬でうまく二つに割れたものもある

名譽ある戰死だといつて別の所に置く、芋堀つた跡に秋菜を播く

夜になつて野村君が訪問された、机にもたれて夜更くる迄話す

十二時頃床に就けば、障子の破れ穴より眞圓い、水晶の樣な月が見える

小夜更けて虫の聲さへ絶え絶ねにねやの隙もる月ぞさやけき

和歌

新校舍へ通ひける途上の口すさみ　安井　正夫

もみぢはをみつつかよへばまなびやのとをきもちかくれもほゆるかな。

學生諸氏と前後しつつ登校しける途上よめる　同　人

若人にたちおくれじと急くこそれいいても老いぬこころなりけれ

新校舍開校の日よめる　竹軒

山々はもみぢの錦かけてけりにひまなびやをひらくあしたに

安井大人の歌に和す　同　人

山川のきよきかはせを朝夕にみつつかよへば物思ひもなし

新校舍に己が家の梅の樹を移しうえて學びやに引きうえられて來む春は色香も深く咲きにほふらむ　安井　正夫

安井老人の歌に和す二首　珍竹　山人

新しく開くる御世に老人も立ちおくれじといそぐをゝしさ

若人もまなびの道にいそぐらむ老になづまぬ君にならひて

安井大人老梅を學校に寄せられしを　珍竹　山人

移しうゑし梅の老樹も今年より若がへりして春をまつらむ

花も實もある梅の木をうつしうゑて學びの庭の教とはせむ

駒ヶ岳をよめる　同　人

庭先にうりゆる駒の谷々は早冬ざらの景色とぞ見る

眼前の景色を　同　人

峰は雪ふもとの里は紅葉して秋と冬とは共にきにけり

通信

竹内房太郎君通信

謹啓林間に酒を温めて紅葉を焚くの句も思ひ浮ばるゝの候と相成申候處諸先生始め校友會諸彦益御多詳の御義と遙察乍陰祝い奉候爾來は久濶多罪平に御寛恕下され度二に御陰樣にて迂生事も在校時代と同斷恙なく天性の無鐵砲暮し罷在候間乍慮外御安意下され度候

鳴呼月日に關守なしとは今更の繰言に候が實際在校時代に於ては左程の深き意味は知らずに只其日其日の苦艱を免れ居り候位にて同窓生始め當時の諸先生は能く御了知に相成居る特殊の者に有之候ひき然るに校を出でしより日月の經過は一層甚しき感に打たるゝのみに御座候迂生は去る四十年縣立第一回の卒業者にして即ち今日より五年前足掛六年前に母校を出でたる一分子に有之現代に於ける校友諸彦中松田先生林先生征矢野先生及安井書記の外一人も御了知は無之尤も迂生としても右と同斷に有之從つて今日明日と通信も疎に相成候次第に有之候但し決して先生及諸彦を度外視致したるには無之も所謂之れが人情の通性に感染せし結果に外ならず候依て此間に於ける自分の經過を左記し之れ迄の責を謝せん覺悟に候前記の通り迂生は四十年三月母校を出で直ちに鄉里石川縣羽咋郡高廣町へ歸り居り候處同年四月青森大林區署より雇を命ぜられ月給大枚拾四圓給與すとの打電を受けしも當時家事上の都合により六月迄採用方猶豫願出で六月十五日出廳辭令を受け明十六日より本大林區署へ出署勤務致候が出署勤務の名義は余程出來ては居るがどつこい至る所赤毛布だらけ何處が何課やら彼所が何用紙何書類箱やら薩張眞暗にて大閉口頓首致し居る中十月今別小林區署へ轉勤に相成官行所伐事業詰員被命十二月任森林主事爾來矢張該詰員にて事業實行致し居り候に四十二年五月末日にて一先該詰員を打切り增川小林區署第一號增川保護區官舍詰（四十二年二月一日より增川へ移轉同時に增川小林區署と改稱せらる）に相成之れより職替り專ら腰に鉈を下げ國有林野を巡視せざるを得ざるの役目となり官名は能いが中々苦勞な仕事に御座候即ち御了知の通り一寸の口にも彼の主事が或る保護區員が甚だしきは保護區員位が仕事が判るものかと陰に聞く其の痛さ實に權利があり責任がある樞要の官吏ながら右の口すさびに過ふ度毎に悲しみつゝ仕方なしと希望を遠き將來に措き職務に從事致居候處四十四年八月任技手即時に保護區詰を免ぜられ再び官行斫伐事業の擔當を致し之れ等內外業に從事罷在候

御了知の通り林區署の業務は中々雜多なるものに有之候が今日研究すべき余地のあるものは至つて小なく且つ分課となり居るため勝手の仕事や研究に奔走すれば事務の手遲れを生ずる懸念あり即ち彼の試驗的の機具器械等の設備あるにあらず從て仕事は粗放的なるものに御座候

幸ひにして當增川小林區署には木材の解剖機を日夜見聞し得る製材所設置有之ために多少の稗益或は希望を全ふするを得るは大に幸福なる義に御座候

別紙大署增川製材につき記事御紹介申上候

尙ほ見聞上より得たる事項と愚考とに比較對照し製材所建設上に於ける調書は目下事務の繁閑により原稿作製中に有之追つて誌上を汚す見込に御座候

寄宿舍便り

錦着飾る木曾山の秋色に對ひて立てる寮の近況御報申上候

九月二十五日は舊曆八月十五日にて例によれば觀月會の催ある筈に候處本年は御承知の通り大喪中のことに候へば舍内にて枝豆の接待を受け後校長及北村、新家兩教諭引率の下に新校舍に散策し叢雲の間よりもるゝ月を賞しつゝ芝草生ふる校庭にて心ばかりの會を開き申候、先づ安藤校長は立ちて觀月の由來を說明し月を眺めては運命の定りなきを聯想する旨を附言せられ次に北村先生は月に盈虧あるは地球の陽光を遮斷するによる人生また障碍多しされば月の千載を通じて屈せず節を持するを鑑戒として吾人は常に身心を鍛錬し置きすは鎌倉といふ塲合にも動せざるの用意あるを要す此意味に於て吾輩は冷水浴を奬むてふことを新家先生は月につきて古人の起せる感想中安部仲麿の青海原云々の和歌と謙信の霜滿陣營云々の詩とを提供され仲麿の如く月を見ては故郷を偲ぶは人情の然あるべきものなるもまた或る時は謙信の如く望郷の念を斷ち己が志す所に向て勇往邁進せざる可からざる旨を述べられ次で都竹武次郎君立ち吾人は須らく日月の運行と共に進歩發展せざるべからずと云へる題下に例の達辨を振はれ坂田勘太郎君は三五の月の圓滿なるを捉へ來りて身体の圓滿なる發育を期するため近來靜座法を勵行することにより腹部より次第に膨れ出し漸次全身に及ばんとしつゝありされば北村先生の冷水浴と共にまた靜座法を併せ奬むるの旨を滑稽諧謔を交へて述べらるゝありて會を閉ぢ朧月ながら影を踏みて歸舍致し申候

學校は十月一日より愈々移轉致し候も寄宿舍は未だ新築落成の域に至らずために從來の寄宿舍より通學致し居り候、今日まで草履がけにて飛石便ひに通ひ居りしに引き續き雨天の如きは雨具のなき者も多かへ晝食にまで通ふことに候へは急に不便を感じ殊に雨天の分裝可笑しく見受けられ數有之種々雜多の極めたり

佐藤教諭此度大塲と改姓本日公示

○九月廿七日　和歌山縣立農林學校林科三年生九名教師一名と共に來校參觀

本日放課後職員生徒一同校庭に整列校長は縣よりの訓令に基づき奬章撤回に就て訓辭を垂れ次に明日より新校舍へ移轉開始に付訓諭する處あり且つ十餘年の久しき吾人幾多同學を收容し多大の便益を與へたる舊校舍と別るゝに際し俯仰低回無量の感慨に堪へざるものあり吾人は宜しく其恩惠を偲び永く思慕して心に忘れざるべきを述べ最後に服裝檢査を行ひて解散せり因に舊校舍は本校移轉後郡役所假事務所となり明年四月よりは小學校假教塲となる筈なり但し校庭には寄宿生の運動塲として猶使用すべし

○九月廿八日　移轉第一日なり作業に就て

移轉第一日なり作業に就て

○九月廿八日　安藤校長は下伊那郡主催に係る竹林栽培講演會に出演の爲本日出發二十日下伊那郡喬木村阿嶋に於て二十一日飯田に於て二十二日伊賀良村に於て講演並に地指導をなし廿四日歸校

○九月廿一日　三學年生一同は北村教諭引率の下に餘訪郡原村に於ける落葉松種子採集の實況見學及仝村苗圃視察の目的を以て出發二泊の上廿三日午後歸校

○九月廿二日　新潟縣立加茂農林學校林科第三年生三十二名沓木、木暮兩教諭指導の下に來校參觀、本縣農事試驗塲加藤技手亦來訪

○九月廿六日　安藤校長及嶋内教諭の歡迎會は御大葬に就き是迄延期中の處第一期更も經過せしを以て郡長町長其他の發起に因り愈々本日を以て見晴樓上に開會郡長先づ開會の辭を陳べ次ぎて安藤校長並に嶋内教諭の挨拶あり會者は發起人の外松田、内藤兩技師裁判所判事、稅務署長、蠶病豫防事務所長、郵便局長、郡會議員、町内有志者及學校職員一同にして無慮五十餘名盛會を極めたり

雜報

學校日誌

第二回卒業生川岸滋次郎氏來校舊歡を温めて去る

○九月廿九日　移轉第二日今日は昨日の殘部を運搬す而して午前中既に全部結了したるを以て一部は新校舍の整理に赴き一部は留りて舊校舍内外の清掃に從事し午後三時を以て休止す

○九月三十日　今日微雨、一同新校舍に赴き教室、廊下及窓硝子の洒掃拂拭に從事す午後天晴れたるを以て前庭の除草を行ひ三時終結、以上三日を以て校具全部の運搬及整理を完結したるものにて豫定より一日を早めぬ

○十月一日　本日は愈御眞影奉移に兼ねて移轉式擧行の當日なり午前八時林教諭は先づ六名の生徒をして御眞影神庫を擔はしめ新校舍に同行し同時に宮田水無神社神官新校舍に至り内外の祓除を行ひ九時職員生徒一同舊校庭に整列校長の誘導によりて征矢野書記御眞影を捧持して玄關前に至る此時一同最敬禮を行ひ斯くて行伍肅々一隊新校舍に向ひぬ此日秋晴一碧迤蛇たる新開の道銃光劍影日に輝き衣帽參差として行く所步調の響を聞くのみにして一語を聞かず壯嚴の氣敬虔の情自ら迫るを覺えぬ新校舍に於ては玄關に紅白の幕を張り國旗を揭揚し林教諭、安井書記、宮田神官其他新聞社員等の奉迎せるあり一同校庭に着するや玄關を正面に横隊となり御眞影に對して最敬禮を行ひ終つて直に御眞影を假奉安室に奉安し一同解散暫時休憩す

午前十時一同更に雨天体操塲に集合移轉式を擧行す安藤校長先づ御眞影奉遷の無事終了したる喜を述べ次に移轉に就て訓辭を垂る其要に曰く本日の式は落成の意味には非す只舊校舍より新校舍に移轉したる印としての式なり若夫落成式の如きは明年完成の日を俟て擧行すべし而して此三日間の移轉作業に於て職員生徒一同が努力奮鬪の結果豫定より一日を早め得たるは衷心愉快を禁ずる能はず又其間天氣幸に良好にして作業上何等の支障を見ず且亦本日は近來の快晴にして一点の浮雲をも認めざるは本校前途の慶福を卜するに足らむ抑々居は人心を移すとかや今や諸子は其名も新開村の新校舍に移轉せり此際宜しく心氣を一轉し殊に縣民が多大の費用を投じて本校を建設せる所以を思ひ愈々志操を堅實にして益々學業を砥礪すべし余は本日特に神官を煩し我邦の古式に則り本校の清祓式を行はしめぬ要は既に外觀の美を得たれば更に内容たる諸子の精神を層一層清白純潔にして一点妖氛をも留めざらしめんとの微意に外ならず諸子之を勉めざらしめよとて懇々說示する所あり終て三年生久保田吾良生徒總代として左の答辭を朗讀し是にて式を閉ぢぬ因に本日の式塲に參列せるは職員の外校舍建築監督古宮氏及新聞社員宮林諏訪の兩氏等なりき

答辭

吾等ガ旦暮翹望セシ新築校舍ハ茲ニ漸ク一部ノ竣工ヲ告ゲ愈々本日ヲトシテ移轉式ヲ擧行セラルヽニ至リヌ生等一同此佳日ニ際會スル事ヲ得且又校長先生ヨリ懇篤ナル訓辭ヲ賜ハル衷心誠ニ欣悅ノ情ニ堪ヘザル也熟々惟ミルニ本校ノ地タル土地幽邃ニシテ閑雅ニ氣清クシテ燥ニ四周山ヲ繞ラシテ自然ノ大教塲ヲナシ演習林ハ指呼ノ間ニ在リテ自由ノ研究ニ委スル等實ニ山林學校トシテ好適ノ地位タルヲ失ハズ加之校舍宏壯諸室完備之ヲ舊校舍ニ比スレハ天淵モ啻ナラザル也生等曩ニ舊校舍ニ在リテ孜々トシテ學事ニ勉ムト雖其狹隘ヲ喞チ不便ヲ歎ズルヤ久シ今ヤ新校舍成ルニ及ビ此ニ移リテ修學上至大ノ便益ヲ得ントス嗚呼生等多年ノ宿望茲ニ始メテ達セラレタリト云フ可ク欣喜何物カ之ニ若カン思フニ我校ハ茲ニ外觀ノ美ヲ得テ又益々内容ノ善ヲ充實スヘキ秋トハナリヌ我校ノ前途更ニ多幸多忙ナリト云フヘシ此時ニ當リテ生等ハ心機一轉益々精神ヲ旺盛ニシ氣魄ヲ鞏固ニシ校長先生ノ訓辭ヲ服膺シ俯シテハ孜々タル木曾ノ溪流ノ潔キヲ以テ心トシ仰ギテハ三十六峰駒ケ岳ノ高キヲ以テ理想トシ眞勉以テ淬礪ノ誠ヲ致シ他日大ニ林業界ノ爲ニ貢獻スル處アラン事ヲ期ス茲ニ本日ノ移轉式ニ際シ恭シク本校ノ前途ヲ祝福シ併セテ生等ノ覺悟ヲ披瀝シ謹ミテ校長先生ノ訓辭ニ答フ

大正元年十月一日

生徒總代　久保田吾良

式後心許りの移轉祝として枝豆及大福餅を頒つ生徒は三々伍々校庭の芝生に憩ひて嬉々として且つ食ひ且つ語る

○十月三日　北安曇郡農業技手儀同禮太郎氏外十名及奈良縣立農林校林科三年生十九名は鈴木、幸脇兩教諭に引率せられ來校參觀す由來奈良農林は我校とは姉妹の關係あり殊に安藤本校長は嘗て同校に職を奉じ親しく薫陶せる因を以て特に本校生徒を集めて紹介し今後益々親睦を厚うして相提携して林業界に盡力すべきを希望せられぬ

○十月四日　大塲教諭本日東筑摩郡東部農學校に於ける實業學校研究會に列席の爲出張序を以て同郡農業の一班を視察し六日歸校

○十月四日　本日安藤校長出縣序を以て郡林業主任會に列席六日須坂に於げる第十二

回信濃山林會總會に列席七八の両日森林視察團隊に加はり臨地講演を爲し九日の解散式を終へ十日歸校

○十月九日　高遠小學校長山田鎌太郎氏外教員二名生徒五十名を率ゐて來校參觀

○十月十一日　上水内郡東部農學校教員志村龜治氏外一名生徒廿九名と共に來校參觀

○十月十五日　三重縣農林學校農科三年生二十二名は佐藤教諭外一名に引率せられ來校參觀

林界雜俎

○林業主任會議　本縣各郡林業主任會議は十月三、四兩日本廳内に開會知事の訓示あり左記諮問事項其他を協議せり

知事訓示

本縣林業の趨勢を察するに逐年發達の傾向を有するものゝ如し之れ諸子平素の努力に負ふ處尠からず然りと雖林野に關する事業は素永遠の計圖を要し一時の狀態を以て滿足すべからざるや勿論にして就中左記事項の如きは更に大に諸子の奮勵を促す所なり

公有林野の整理開發に就ては從來屢々指示する所にして諸子亦能く勸奬に努めらるゝと雖其根本たる部落有林野の統一入會權の解除等尚大に力を盡すべき餘地を存す

森林に慘害を與ふる野火防止に就ては昨年規則を改正して取締を嚴密ならしめたりと雖一面に於て各其地方人民を啓發し野火の眞に恐るべき損害あることを自覺せしむるにあらざれば之が目的を達し難かるべし

保安林は本縣か治水上重要の事業として調査編入の手續を爲しつゝある處にして漸次其區域は擴大せられんとす之か編入後の保護取締は最も緊切にして保安林たる効果の有無は全く保護取締の如何に存す

苗木の無償下附は本縣既往十數年來實行しつゝある所にして之が効果を全からしめんには直接町村指導の任にある諸子の周匝なる監督を要す

政府の治水事業と相俟て前年來本縣が實行しつゝある公有林野造林補助及荒廢地復舊補助事業は尚創搬に屬するを以て其精神のある處を徹底せしめ適當に之を奬勵するの要あり

本縣直接の事業たる縣有模範林は漸次增加するに至り之が保護管理に關しては亦郡の監督に俟つ所多しとす

保安林標柱建設保安林特別補償等は國庫の經費に依り今後縣が直接之を行ふものなりと雖も是亦郡の幇助を要す

以上の外地方に適應せる林野副業の奬勵等林野に關する行政事務は日を逐ふて周密に且繁多ならんとす諸子は能く郡の狀態に顧み適當の方法に基き林業發展の爲めに益々奮勵努力せられんことを望む

諮問事項

一、木炭改良奬勵の訓令發付後の狀況如何
二、植林に對する告諭發布後の取扱振如何
三、木炭の外適當なる林野副業奬勵の狀況
四、水害防備林設置の狀況
五、森林組合設立の狀況
六、民設苗圃改良手段
七、保安林編入解除を所有者へ通知の狀況指示事項
一、公有林野の整理開發の件

公有林野の整理開發に就て此來屢次訓示照會せる所なりと雖尚未だ完全に其實を擧げたるもの尠く其の部落有に屬するもの及入會關係を有するものありては舊に依りて濫採に委し造林經營の如き更に顧みられず廣漠たる林野を空しく荒廢に歸せしむるもの多きは頗る遺憾とする所なり之等にありては速に其關係を調査研究し相當造林の方法を實行せしむるを要す

二、林野火災防止に關する件

林野火入の有害なるは稍々一般に感知するに至れるが如しと雖も偶然發生せる野火に對する防止手段尚未だ等閑に付せられあるやに感せらる一層注意し林野に於て火災の原因となるべき行爲なからしむると共に一朝發火の際に於て之を防止するに十分の力を致さしむる樣適當の方法に依り誘導啓發するを要す

三、林業講習に關する件

林業思想の發達を促進する爲林業講習を一般に普及せしむる目的を以て本年告示第二百十九號を以て之が規定を改定せられたり今後仝規定に依り可成各郡各所に開催することに注意するを要す

四、造林免租申請に關する件

森林法第十二條に依る造林免租の申請は小縣郡を除けば殆と絶無の狀況なり多くは法律の精神を知悉せざるものと認めらる本件の如き亦林業奬勵の一手段として普く知悉申請せしむるを要す

五、荒廢地復舊補助に關する件

客年縣令第二十一號荒廢地復舊補助規定に基き治水上重要の關係ある公有社寺有私有に屬する保安林荒廢地に對し昨年度より補助を與へ事業施行せしめつゝある

も未だ該規程の制定せるを知悉せざる者もなきにあらず必要個所に對しては關係者を誘導して益々多數の補助申請せしむるを要す

六、保安林標柱保護に關する件

客年四月四日農商務省訓令第七號標柱建設規程に基き保安林及森林法第三十二條に該當する開墾禁止制限地に對して昨年度より標柱建設中なるも建設后は之れを移轉汚損し又は毀壞せざる樣十分監督せらるゝを要す

七、公有林野造林補助に關する件

イ、新植造林地の手入勵行すべきこと

造林地手入に關しては本年告諭第一號を以て詳細注意致置たる筈なるも各地造林の實況を視るに尚未だ一般に其趣旨徹底せざる憂あり

之に關しては可成町村をして新植造林費の他に手入費を豫算に計上せしめ造林后の手入を勵行せしめらるゝを要す

ロ、補助申請を爲す町村は可成其林野施業要領を定め將來造林方針を立つること補助申請に對し豫定の如く事業を爲す屢々事業變更を爲す向あるが右は必竟將來施業方針定まらす各年植栽樹種面積不確定に依るものと思惟するを以て可成其林野に豫め之を實査し造林案を調成し逐年之を準據し造林を爲す如く誘導せらるゝを要す

ハ、造林は將來利用上の關係に鑑み秩序的に實行すること

造林地の所々散点するは常に管理上不便なるのみならず將來伐採利用上頗る不利益なるを以て天然人工造林共一地より漸次序を追て實行し尚毎年の造林地は申請前必ず實測し林地面積を精確に算定し置くを要す

八、統計の正確を期する件

林野の統計は他の統計に比し特に杜撰粗漏なるやの感なきにあらず相當の材料に依り可成之が正確を期し且其進達期限を誤らざるを要す

注意事項

一、縣設苗圃より下付を受けたる移植苗圃建札設置の件

縣費養成苗木の下附を受けたる移植苗圃の指導監督に植樹奬勵上極めて緊要の事に屬す然るに其苗圃所在たる直に認識する事能はず故に指導奬勵の上必ず標札設置を要す

二、苗木下付出願豫定調査に對する査定數量と願書の數量と相違なからしむること

植樹奬勵苗木下付規則第二條の二による苗木下付の豫定調並に之れに依つて査定通知したる數量は既に彼此掛酌を加へたるものなれば願書の數量に過不足を生ずる時は取扱上差支を生ずるを以て特に注意せらるべきこと

三、赤松苗木下付の件

赤松苗木にして個人有土地の危害の虞ある個所に造林すべき數量少からず然るに往々其手續を知らざる爲め出願せざるもの多し如斯個所には可成便宜を與へ出願せしむることに注意せらること

四、保安林に關する件

イ、植栽に關する事項

ロ、伐採に關する事項

ハ、下草採取に關する事項

ニ、所有權移轉に關する事項

五、開墾に關する件

イ、開墾調査並意見書に關する事項

ロ、保安林開墾に關する事項

ハ、公有林社寺有林開墾に關する事項

ニ、土石採掘に關する事項

因に本會に出席せる各郡林業主任左の如し

南佐久郡　郡書記　小林健一郎
北佐久郡　仝　木根淵深志
小縣郡　林業技手　杉本貫　本校卒業生
諏訪郡　仝　武居喜平治
上伊那郡　仝　中村義太郎
下伊那郡　仝　小幡代吉
西筑摩郡　仝　今牧棟吉
東筑摩郡　郡書記　肥後金四郎　本校卒業生
南安曇郡　仝　青木勘平
北安曇郡　林業技手　宮嶋金次郎
更級郡　仝　田中武一
埴科郡　仝　服部鍊爾
上高井郡　仝　德永喜三次
下高井郡　仝　兒野榮　本校卒業生
上水内郡　仝　山本虎之助
下水内郡　郡書記　貴嶋正之進

○第十二回信濃山林大會　同會は十月六日上高井郡須坂小學校に開會力石會長代理戊申詔書を捧讀し一場の告示を爲し甲田土高井郡長其他の祝辭松平本會理事の會務及會計報告あり力石會長代理會務擴張に就き希望演說をなし午后左の講演あり來賓の主なる者は各郡市長新聞記者有力者等にて約五百餘名頗る盛會を極めぬ

1、信州に誇るべき森林と童謠　宮島金次郎
2、林業の計畫に付　林學博士　右田半四郎
3、林業と他の生産業の關係　仝　寺崎農商務技師
4、荒廢地と落葉濶葉樹　林學士　弘世弘藏
5、山林教育に就而の希望　仝　安藤時雄

明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可

○山林旅行　仝上信濃山林會は七日より森林旅行を企て團員約百廿名は須坂出發仁禮杉林及附近一帶の造林地及、保科村外八ケ村綿營植林地其他を視察し午後北信牧畜生產組合事務所着泊八日仝牧場及小縣郡有林村有林等を視察し夫より保科國有林及砂防工事營林狀況を視察し保科村に宿泊九日午前八時解散式を行へり

會員移動

青森大林區署　給十級俸　林務技手　赤岩藤太郎
宮內省へ出向を命ず　仝上　由尾忠助
宮城大林區署　給月俸十七圓　森林主事　原喜四三
仝　給月俸十七圓　仝上　南勝右衛門
東京大林區署　給月俸十六圓　任森林主事　小石彌三郎
長野大林區署　給十給俸　林務技手　坂本忠治
宮內省へ出向を命ず　休職林務技手　野知里慶助
給月俸十七圓　森林主事　中候伍市
仝　仝上　瀨在實
叙正八位　仝上　甲田林
依願免本官　吉田佐十郎
雇を命ず　征矢野余所夫
仝上
廣島大林區署　給月俸十六圓　森林主事　日野雅亮
高知大林區署　給月俸十三圓　仝上　宮澤嘉一
依願免本官　仝上　藤田要吾
熊本大林區署　任森林主事　給月俸十四圓　木村康明
鹿兒島大林區署　給九級俸　林務技手　古根是
任森林主事　給月俸十八圓　征矢野克己
雇を命ず　休職森林主事　金田美行
青森縣　任林業技手月俸二十五圓給與　長谷部兵治
給月俸二十七圓　廣瀨靜之進
林業技手
福嶋縣　月俸十九圓給與　倉澤眞
林業技手
長野縣　依願解職　仝上　木村音二郎
下高井郡立農林學校助教諭心得を命ず　藤田要吾
雇を命ず　篠原昇士
給五級俸足柄上郡立農學校助教諭　松本清太
神奈川縣　叙高等官六等　技師　江崎熊太郎
岐阜縣　給月俸二圓　技手　木村鍬次郎
三重縣　給月俸廿六圓　林業技手
給月俸二圓　給月俸二十四圓　仝上　武久貞一
愛媛縣　給月俸一圓　給月俸二十三圓　仝上　松澤莊太郎
任東宇和郡林業技手　月俸卅圓給與　倉科和一郎
帝室林野管理局木曾支廳　任技手　月俸二十　野知里慶助
叙判任官四等　三圓支給
任技手　叙判任官四等　月俸二十圓支給　由尾忠助
林務技手
依願免本官　技手　西野入德
仝上　仝上　倉科浦一郎
叙正八位　仝上　奥原吉右衛門
仝上名古屋支廳
雇を命ず　中田辰雄
仝　仝上　甲田林
仝上　石曾根四郎
沖縄縣　任技師　大城朝幹
叙高等官八等　技手
朝鮮總督府　任技手　西野入德
仝上　本多清右衛門

會費領收報告

七拾貳錢日野雅亮君、參拾六錢篠原忠治君
江畑前校長へ紀念品贈呈に付
金員寄附者左の通り

參圓伊藤益雄君、貳圓宛本多清右衛門君、高柴眞次郎君、中嶋要人君、壹圓宛村松一清君、蜂須賀宮次郎君、盧川金次君、五拾錢宛吉澤英雄君、千村善三君、嶋田雄太郎君、西尾嘉一君、永井須君、乙谷耕吉君、木下清君、宮崎次郎君、奥原吉右衛門君、下村博君、丸山金三郎君

小計拾七圓五十錢
累計六拾九圓五拾錢

○卒業生諸兄に白す、江畑前校長への寄附金は來る十一月十五日を以て締切と致候間夫迄に御送金願上候

○尚當分中止の振替貯金口座番號及代表者左の通改め開始致候間御承知相成度候

口座番號　東京壹七六〇〇
代表者　安藤時雄

謹告

陳者岐蘇林友是迄無代贈呈致居候處今般經濟上の都合に依り十月限配本中止可致今後御希望の方は一ケ年實費三十六錢前納相成度爲念此段廣告候也

大正元年十月　岐蘇林友編輯部

各小學校各町村役場
青年會御中

木曾產樹實

右多年御愛顧を蒙り難有奉拜謝候本年も良種多量採收致置候間陸續御用命被下度奉懇願候

木曾駒ケ根村上松
種苗販賣　蜂須賀忠四郎

○投稿規約

一、原稿締切は毎月十五日限り
二、原稿は總て廿行十九字詰の事
三、字体は正楷明瞭を要する事